英文学としての「ヨブ記」
—— その芸術性再考

吉　崎　泰　博

Authorized Version の「ヨブ記」は，英文学の一作品として高く評価されているが[1]，尚その真価を認められるには至っていない。それは「ヨブ記」のテーマが誤解され，その形式が把握されていないことに起因している。たとえば石田憲次氏は，ほとんどの聖書学者と同様に，ヨブの問題を，義人の苦難の理由を問うという客観的な問題にもとめ，内容と形式とが一体をなしていないとする。そして，「『ヨブ記』は芸術品としてよりも，人間記録としてより偉大である」という[2]。しかしながら，「ヨブ記」のテーマは，神との関係における人間の，生死にかかわる切実な問題としてのみ存在しているのであって，しかも，その内容を表現するにふさわしい形式がとられているのである。また，「ヨブ記」には，ひとつの文学的型があり，その「型」は他の偉大な文学作品，たとえば「ハムレット」のなかにも見出されるのである。本論は，これらの点に言及しつつ，「ヨブ記」がたんなる「宗教的人間記録」にとどまらず，芸術作品として偉大であることを，論証せんとするものである。

---

(1) A.S. Cook, "The A.V. and its Influence" (*Cambridge History of English Literature*, vol. IV, 1909) pp.45–50; Thomas Carlyle, *On Heroes and Hero-Worship*, Oxford, 1841, 1950, pp. 63–64; R.G. Moulton, *The Literary Study of the Bible*. D.C. Hearth, 1899, pp. 3–41; 石田憲次「英文学としての旧約聖書とアポクリファ」, 研究社, 1960, p. 467以下等を参照されたい。

(2) 石田氏, 上掲書, p. 471.

I　ヨブの問題の所在

聖書の文学的研究を集大成したR. G. モールトンをも含めてほとんどの学者は，ヨブが自分は義人であるのに，なぜ苦しまねばならないか，という問題を終始追求していると考える。したがって，それをテーマとしてとりあげてこの作品を解釈し，その問題にたいする解決の有無を論じる。[3] しかし，テキストを注意深く読むならば，ヨブにとって，そのようなことは全然問題でないことが明らかである。彼が問題としているのは，実に神の摂理を疑わざるを得ないという絶望的な事実である。以下このことをみていこう。

義人ヨブは突如その持物，財産のすべてを失うが，その理由を神に問うどころか，彼は神を讃美さえしている。

Naked came I out of my mother's womb,
And naked shall I return thither:
The Lord gave, and the Lord hath taken away;
Blessed be the name of the Lord. (i.20)

また，彼の身体にまで災がおよんで，妻から「神を呪って死ね」（ii. 9）といわれても，

What? shall we receive good at the hand of
God, and shall we not receive evil? (ii.10)

といって妻を諫めている。このことは明らかに，ヨブが「義人の苦難」を

---

(3) 18世紀以前には，ヨブの試練がテーマであると考えられ，また，ヨブは復活の予言者としてみられていたために，この誤謬は犯されなかったが，その後は，いわゆる「実存的解釈」をうち出している我国の浅野順一氏でさえ，その誤謬を免れてはいない。q.v. R.G. Moulton, *op. cit.*, p. 6; Davidson, *The Book of Job*, Cambridge, 1884, 1951, p. xxv; Driver, *Introduction to the Literature of the Old Testament*, T & T Clark, 1891, 1950, p. 409; Driver & Gray, *International Critical Commentary, Job*, T & T Clark, 1921, p. li; G. T. Moore, *The Literature of the Old Testament*, Oxford, 1913, 1948, p. 210; 浅野順一，「ヨブ記の研究」創文社，1963，p. 11等。

疑問として提出してはいないことを示している。そこに読みとれるのは神への不満ではなく，神の摂理にたいする，深い信頼の念である。また，23章には，

……what his soul desireth, even that he doeth.
For he performeth the thing that is appointed for me. (13-14)

とある。ここには神に対する抗議の気持が込められているとはいえ，ヨブが苦難をうけるのは神の意志のみによるのだという，彼の明確な思想がうかがわれる。

3章にはいると，ヨブは苦しさに耐えかねて叫び声をあげる。彼は自分の生れた日をのろい，死を望むことを通して，間接的に神に不平をいっているようにみえる。しかし，そののろいの言葉を正しく理解するには，上述の2章10節の台詞をいった後に，"seven days and seven nights" (ii. 13) にわたる苦しみの時があったことを考慮に入れねばならない。モールトンが「時間の試練」として，その苦しみの7日間を重要視しているのは正しい。[4] すなわち，人間としての極限にいたるまでの苦しみを経験したヨブは，悲痛な苦しみの声をあげた。それはたしかに，言葉の表現上，神にたいする挑戦のいみをふくんではいるが，それはあくまでも苦痛に原因する絶叫だとみるべきである。神そのものであるとされているイエスでさえ，十字架の上で，"My God, my God, why hast thou forsaken me?"[5] という質問を苦しみのあまり叫んでいることを，ここで想起したい。（ドイツの神学者C. ヴエスターマンは，悲嘆の叫び≪Klage≫を中心としてこの書を解釈してさえいる[6]）

---

(4) R. G. Moulton, *The Literary Study of the Bible*, p. 5.

(5) *The Gospel According to St. Matthew*, xxvii.46. この言葉が神にその理由を問うているのでないことは論外である。

(6) Westermann は少々悲嘆の叫びに固執しすぎている。"Der Dichter stellt eine Handlung, ein Geschehen dar . . . das mit einer Klage beginnt; auf diese Klage sollte eine Tröstung folgen, die sich aber zum

ヨブの苦痛の声を理解せずに，友人たちは伝統的な因果応報の教義[7]をおしつけて，ヨブを非難する。悪人が栄え，義人が苦難にあっている事実にヨブが言及するのは，友人たちの浅薄な因果応報説の不当性を論じるためにすぎない。義人の災，悪人の繁栄を彼がはじめて口にするのは，ひとしきり議論の終った12章でのことであるし，彼がそのことを論じているのは，わずかに三箇所だけである[8]。しかも，そのうち一箇所は3節しか費しておらず，他の二箇所はそれが友人への反論のために述べられていることを示す言葉を，その前後にともなっている。

Mark me, and be astonished,
And lay your hand upon your mouth. (xxi. 5)

How then comfort ye me in vain,
Seeing in your answers there remaineth falsehood? (xxi.34)

And if it be not so now,
Who will make me a liar,
And make my speech nothing worth? (xxiv.25)

ある批評家たち，たとえば S. テリエンは，9章13—24節を神にたいするヨブの理論的な挑戦だと理解する。そして17節の，

For he breaketh me with a tempest,
And multiplieth my wounds without cause.

という台詞，とくに "without cause" の語をもって，ヨブが自己の正し

Streitgespräch wandelt; nach dem ergebnislosen Abbrechen dieses Streitgespräches kehrt die Klage wieder und sie endet jetzt in einer Herausforderung Gottes. "*Der Aufbau des Buches Hiob*, Tübingen, J. C. B. Mohr, 1956, pp. 6-7.

(7) すなわち，友人が終始一貫して強くもっている「義人は必ず栄え，悪人は必ず滅びる」という教義で，それによってヨブの苦難を彼の罪の結果だとする。

(8) xii.4-6 と xxi.6-33 と xxiv.2-25 の三箇所である。

さを神の前に主張しているのだと説明する。[9] しかし，これは本質的には3章ののろいと同じ性質のもので，3章におけるのろいが，友人の因果応報説に遇って，このような言葉に変ってきているのだと理解せねばならない。なぜなら，後に述べるごとく，この時点でのヨブの問題は，如何に呼び求めても彼の信頼する神が出現しない，という一点にあるからであり，また，同じ9章の中に，

…… how should man be just with God?
If he will contend with him,
He cannot answer him one of a thousand. (2-3)

How much less shall I answer him,
And choose out my words to reason with him?
Whom, though I were righteous,
Yet would I not answer,
But I would make supplication to my judge. (14-15)

Though I were perfect,
Yet would I not know my soul. (21)

といっており，ヨブが自分にまったく罪がないと神に主張しているのではないことを明らかに示しているからである。ここでも，神の苛酷さへのヨブの言及は，深刻な精神的苦痛にのみ起因していると読むべきであろう。

このように，悪人の繁栄と義人の苦難とについてのヨブの論議は神への質問ではなく，「なぜ私をこのように苦しめるのか」という問は，キリストの「なぜ私をみ捨てたのか」という問と同じく，ひとつの叫び声にすぎない。[10] ヨブは神の摂理にたいする深い信頼のゆえに，自己にふりかかった

(9) Samuel Terrien, *The Interpreter's Bible, Job*, Abingdon, c1954, p. 899.

(10) ヨブのこの問が作品全体の中心テーマでないことに気付いた，Hanson や Terrien 等でさえも，この事実には気付いていなかったようである。Anthony & Miriam Hanson, *The Book of Job*, SCM, 1953, p. 19; Terrien, *Interpreter's, Job*, p. 899.

困難の理由を神に尋ねる必要を感じなかった。彼は理性的には，神から災をうけても安んじていることができたのである。

では作品の大部分を占める論議を通じて，ヨブが苦悩している問題は何であるか。H. リヒターは，それをはじめは友人とヨブの，後には神とヨブとの間の法廷的背景にたった義の論争であり，神の義とヨブの義との間の分裂であるとする。[11] しかし，それはあくまでも外見的な，表面上のことにすぎず，人間ヨブの内面を注視してヨブの問題をみれば，それは次のひとつの点にあったといわねばならない。すなわち，極度の災をこうむったヨブが，苦痛の叫びをあげながらもなお心の底のある点で安心していることができたのは，彼が神の摂理を全く信頼していたが故であった。それにもかかわらず，神がヨブの求めに応じず，彼から遠く離れ去ってしまうように感じたということ，そのために神への信頼が揺らいだという，その一点である。全てのものを失い，自分の肉は蛆に食われ，周囲をとり囲んだ友人たちは，"Is not thy wickedness great? and thine iniquities infinite?" (xxii. 5) とヨブを責める。そこで彼は唯一の拠所である神にますます縋ろうとするが，その神がなおも彼を苦しめ続け，彼の求める死をも与えない。ヨブには神が彼を見捨ててしまったかに思えるのである。このような状況の中で，ギリシヤ悲劇のある主人公のように，「私は神々の仇となった」[12] といって退いてしまうとすれば，ヨブの苦悩は存在しえない。だがヨブは，勇敢にもこの絶対絶命の境地から神に向って絶叫する。曰く，

What is man, that thou shouldest magnify him?
And that thou shouldest set thine heart upon him?
And that thou shouldest visit him every morning,
And try him every moment? (vii.17-18)

---

(11) H. Richter, "Erwägungen zum Hiobproblem"(*Evangelische Theologie*, Juli, 1958. pp. 302-324.)

(12) 呉茂一他三名編，「ギリシヤ悲劇全集」第二巻，人文書院，1960, p. 268.

Wherefore then hast thou brought me forth out of the womb? (x.18)

Cease then, and let me alone,
That I may take comfort a little, (x.20)

Withdraw thine hand far from me:
And let not thy dread make me afraid.
Then call thou, and I will answer. (xiii.21-22)

ここでは，ヨブは自分を見捨ててしまったかに思える神にたいする信頼を，何としてでも再びとり戻そうとしてあがき，もがいているのである。なぜなら，神の僕たるヨブにとっては，神との関係が断たれることは，ただちに永遠の死を意味したのであって，神以外には彼の生きる望みはまったくなかったからである。

神にたいする信頼が揺らいだヨブは，ただ神に向って叫ぶのみでなく，その友に向っても，なかば狂的に論駁する。

Will ye speak wickedly for God?
And talk deceitfully for him?
Will ye accept his person?
Will ye contend for God?
Is it good that he should search you out?
Or as one man mocketh another,
Do ye so mock him? (xiii. 7 - 9)

かと思うと，急に沈んで自己の無力を嘆く。

Man that is born of a woman
Is of few days, and full of trouble
He cometh forth like a flower,
And is cut down:
He fleeth also as a shadow,
And continueth not. (xvi. 1 - 2)

そしてまた，こんなに無力な私をなぜこのように苦しめるのか，と神へ叫ぶ。素朴な正義漢であるヨブは，絶えず自己の内面を表白せねば済まないようである。

II　苦悩表現の技巧

ヨブの真の苦悩，すなわち，友人との関係ではなしに，神との関係における，切実な精神の葛藤という面からみると，この作品の中心をなす長い論議は，決して無意味ではない。多くの人がこれを冗長な議論だとして非難するのは，この作品を正当に理解していないからに他ならない。ヨブの神に向っての絶叫，友人への論駁，絶望の表白などを通して，苦悩にもだえるヨブの姿がいきいきと描かれていることについては既に述べた。ここでは，不注意な読者には一見無意味に並べられているとみえる，ヨブの台詞を通して観察される，苦悩解決へのひとつのプロセスを指摘し，それを，非常に長い論議というこの形式が，その内容に適していることの一論拠としたい。

ヨブの絶望的な叫びにもかかわらず，神は彼をますます残酷にとり扱う。かくして完全に絶望したヨブは，13章に至って苦悩解決の第一段階を踏む。ヨブは友人にたいして，次のようにいう。

Though he slay me, yet will I trust in him:
But I will maintain mine own ways before him. (xiii.15)

彼はここで神の残酷さにたいして自己の道を保持している。神に向ってただ苦悩の絶叫をくりかえす態度から脱却して，というよりは，残酷な神への信頼を失って，彼は積極的に，信頼すべき正義の神を求めて，猛然と突進するに至る。（ある読者はここでヨブの心中における矛盾に気付くであろう。ヨブが信頼できない神に向って信頼できる神を求めているのは，たしかに彼の自己矛盾であるが，彼にとって創造者たる絶対の神はただひとりなので，それ以外に方法はない。そこにこそ，ヨブの苦悩の深刻さが存

在しているのである。）このあたりから次第に "remember me!"(xiv. 3) という言葉に集約されるような，正しい愛の神を求めるヨブの台詞が散見される。

Then call thou, and I will answer: (xiii.22)

Wherefore hidest thou thy face . . . ? (xiii.24)

O that thou wouldest hide me in the grave,
That thou wouldest keep me secret,
Until thy wrath be past,
That thou wouldest appoint me a set time,
And remember me! (xiv.13)

Lay down now, put me in a surety with thee;
Who is he that will strike hands with me? (xvii. 3)

ヨブの苦悩には絶望から熱望へ，熱望から願望へ，願望から希望へ，希望から確信へというひとつの解決の過程が認められることは，内村鑑三氏によってすでに指摘されているとおりである。[13] すなわち，神への信頼を失うという絶望の底から，ヨブは "remember me!" と懇願し，

Thou shalt call, and I will answer thee:
Thou wilt have a desire to the work of thine hands.
For now thou numberest my steps:
Dost thou not watch over my sin?
My transgression is sealed up in a bag,
And thou sewest up mine iniquity. (xiv.15-17)

という希望をもち，そして19章26及び27節の，「私は神をみるであろう，しかも私の味方としてみるであろう」との確信，すなわち，神はやはり正義の神であり，信頼すべき愛の神であるとの確信についに至る。その後は神に信頼をおいたヨブの，次のような言葉がみられるようになる。

---

(13) 内村鑑三，「ヨブ記の研究」，創元社，1950，p. 133，および pp. 160-61.

Will he (=God) plead against me with his great power?
No, but he would put strength in me. (xxiii.6)

. . . he knoweth the way that I take: (xxiii.10)

そしてこの苦悩解決への過程から，当然，神の出現は予想されうる。[14] このように，一見冗長な議論の中に，ヨブの生命をかけた苦悩の様相が克明に描かれているのである。ここに述べた苦悩解決への過程はその一面にすぎない。その他，たとえば，ヨブと友人との間の論点においても，友人の態度においても，明らかに変化が認められるのである。

「ヨブ記」の芸術性が批判される場合の今ひとつの論拠として，登場人物が個性をもっていないこと，殊に三人の友人の間に性格の相異が明らかには認められないことが，普通いわれている。しかし，作者は故意にそうしたのであって，三人の友人の間に明らかな相違があってはならない。なぜなら，このことによって作者が表現しているのは，ヨブをとりまく全ての人がひとり残らずヨブの敵となったこと，及び彼らが口をそろえて，同じようにヨブを罪人だとののしったということなのだからである。[15] このような技法によって作者は，ひとりとして味方になる人がいなかったというヨブの深刻な状況を効果的に描出しているのであり，また，一般の人々が宗教の皮相な教義のために非個性化されているという現実を，あからさまに表現しているのである。

以上に述べたごとく，ヨブの問題を「義人の苦難」であると誤解した批評家たちのいう，「ヨブ記」の芸術的欠陥は，実際は欠陥ではない。一見冗長すぎる友人との論議も，ヨブの精神的苦悩というこの作品のテーマに照して読まれるならば，芸術的に高く評価されるべきものである。

---

(14) しかし，ヨブはなお，29・30章におけるごとく，哀情あふれる悲嘆の声をもあげているのであって，内村氏のいうように，ヨブの問題がここで完全に解決された訳ではない。

(15) 3という数によって，一定の範囲内のもの全体を象徴的に表現することは一般的であって，この場合，ヨブの3人の友人は彼の周囲の人々全部を表わしているとみることができる。

Ⅲ　他の文学作品にみられる「ヨブ記」の型

「ヨブ記」の梗概をたどりつつ，この作品における文学的型を指摘し，他の偉大な文学作品の中にその型が存在することを明らかにしよう。そのことは「ヨブ記」の芸術的普遍性を十分証拠づけるからである。

ヨブは最初，非常に幸福な生活をしていた。「その人となりは全く」，あらゆることにつけて人々の尊敬の的であった。だが突如として彼の身に不幸が及んだ。命以外の全てのものを剝奪され，友人からは罪人とののしられ，唯一の拠所であった神への信頼が揺らいだ。神との関係が断たれることは，ヨブにとっては致命的なできごとである。ヨブはそこで自己の生をのろい，死を熱望するが，彼には自殺は許されない。それ故彼は神をのろい，なおたわごとを並べている友人を酷評する。そのような過程の中で彼が常に切望しているのは，神への信頼を回復することである。（この意味において，ハンソンが「ヨブ記」のテーマを「神の前に立つこと」として，またテリエンが「信仰の意味を問うこと」として把えているのは正しい。[16]）ヨブの問題の根源は，神を信頼できなくなるほど，神が彼にたいして苛酷だということなのであるから，その問題を解決するためには，彼は神に向ってその苛酷さを非難するという大罪をも，敢えて犯さざるをえない。それ以外には方法はないからである。そして彼は，神に向って叫ぶうちに，自己の心中に，くずれやすくはあるが，神はなお信頼すべき神である，とのひとつの確信をうる。しかし，それは彼の問題の部分的解決であって，完全な全体的解決は神の出現によって始めてなされる。そしてその解決後のヨブは，以前にもまして深く神を信頼し，より幸福な人生を送るのである。

この中に認められる文学的型は次のとおりである。1）あらゆる点で人々の手本となるような主人公が幸福に暮している。2）その人にある事件が起り，その結果，主人公の生そのものが無意味になる。3）ある時はそ

---

[16] Hanson, *The Book of Job*, p. 17; Terrien, *Interpreter's, Job*, p. 897.

の問題を解決しようとし，ある時は死を熱望し，またある時は周囲のものに当り散らし，のろって苦悩する。4）問題解決の唯一の手段は，同時に自己の信念に反することでもある。5）しかし，それ以外に方法はなく，あえてそれを行う。6）部分的には自力で解決するが，決定的解決は天の配剤によってなされる。7）より高い次元での新しい人生を生きる。

これを更に簡単にいえば，苦悩を通して人間としてのより高い次元に到達する，という型にまとめられる。この段階での「ヨブ記」の型をもった文学作品は非常に多いが，英文学中では，「リア王」，「ウエイクフィールドの牧師」，H. G. ウエルズの「消えざる火」（*The Undying Fire*）などがあげられる。これらのうち，後者のふたつの小説は，「ヨブ記」の強い影響をうけていることがすでに論じ尽されているし，「リア王」にしても，娘たちの残酷な仕うちによって苦しむことを通して，リアが人間的に大きく成長していることは，いまさら論じるまでもない。したがって，ここでは，7項目にして示した段階での「ヨブ記」の型を，英文学の最高傑作のひとつとされている，「ハムレット」の中にもとめてみよう。

1）「あらゆる点で人々の手本となるような主人公が幸福に暮している。」——このことは劇中の場面としてはでてこないが，事件の起る前のハムレットについては，オフィリアもフォーティンブラスも，このことを認めている。　2）「その人にある事件が起り，その結果，主人公の生そのものが無意味になる。」——ハムレットにふりかかった事件は，デンマークの王妃であり，彼の母親であるガートルードが，早すぎる再婚という不義をなしたこと，および，死んだ王の亡霊から，今では義父である叔父のクローディアスが王を毒殺したのだと，知らされることである。これらのことは，ハムレットにとって決定的な打撃である。テイリアドが明らかにした当時の世界観の中でみると，一国の王が暗々裏に殺害され，王妃がその下手人と不義を行うということは，秩序の世界が崩壊し，正義が行われず，その害悪が国中いたるところに浸透するという結果を伴う。その王と王妃を父母とするハムレットにとって，"Denmark's a prison." (II.ii.239) と

考えられ，"The time is out of joint;" (I.v.189) と思われるのは，当然のことである。このような状態の中では，彼は喜んで生きることができない。彼はむしろ死を望む。

. . . that the Everlasting had not fix'd
His canon 'gainst self-slaughter! (I.ii.132-33)

3）「ある時はその問題を解決しようとし，ある時は死を熱望し，またある時は周囲の者に当り散らし，のろって，苦悩する。」——このことはそのままハムレットの状態である。ハムレットの復讐遅延の原因については種々の見界があるが，原因の如何にかかわらず，表面に現われている態度は，この通りの状態である。4）「問題解決の唯一の手段は，同時に自己の信念に反することでもある。」—ハムレットの問題解決は正しい秩序の回復ということである。そこでこそ始めて，ハムレットは厭世的な自己嫌悪からも抜け出して，本来のいきいきとしたハムレットに帰ることができる。ところが，そのためには母の不義を阻止し，無秩序のたずなを握っている義父を殺さねばならない。義父であろうとも，父を殺すことは恐ろしい大罪であるし，またハリソンが指摘するごとく，当時の復讐劇の伝統からいって，復讐を果すためにはハムレットもまた死なねばならない。[17] 彼にとって，大罪を犯すこと，自己を死へと追いやることは，彼の本性にさからうことであったに相違ない。

. . . the dread of something after death,
The undiscover'd country from whose bourn
No traveller returns, puzzles the will (III.i.78-80)

5）「しかし，それ以外に方法はなく，あえてそれを行う。」——すなわち，母の不義を責め，王を殺すことである。6）「部分的には自力で解決するが，決定的な解決は天の配剤によってなされる」——ハムレットは自

---

(17) G.B. Harrison, *Shakespeare's Tragedies*, Routledge & Kegan Paul, 1951, 1963, p. 92.

力で母を諫め，王を窮地にたたせるが，ほとんどの批評家が認めるように，完全な解決がなされたのは，神の力によってである。第五幕において，ハムレット自身の中に投げやりな気持があることは，すでにブラッドレーによって明らかにされている。[18] 7）「より高い次元での新しい人生を生きる。」——いまや無秩序の根源がとり除かれ，ハムレット自身が賞讃する武勇の士，フォーティンブラスによる新しい秩序の世界が約束され，ハムレットは，"the rest is silence." (V.ii.345) という。この瞬間の彼は，「より高い次元での新しい人生を生き」ていると言えないだろうか。

「ヨブ記」の芸術性については，多くの人が讃辞を与えて惜しまない。殊に，この作品のドラマとして，叙事詩として，また抒情詩としての要素については，モールトンがよく指摘している。[19] だが，これらの他にも，以上みてきたように，ヨブの苦悩の表現における素晴しさ，及び文学作品としての普遍性が指摘されねばならないのである。

---

(18) A.C. Bradley, *Shakespearean Tragedy*, Macmillan. 1957, 1961, p. 116.

(19) Moulton, *The Literary Study of the Bible*. p. 25以下。